

平成22年度遺骨収集・受領完了!! 1,377柱をお迎えす!!



発行所

特定非営利活動法人

JYMA日本青年遺骨収集団

〒102-0076 東京都千代田区五番町2
番町バレス303号室

TEL03-6268-9939

FAX03-3239-0109

URL : <http://www.jyma.org>

e-mail : info@jyma.org

発行人 山口 美朝

編集人 瀬尾 昌平

平成二十二年、当法人では厚生労働省を始めとする各政府機関並びに関係諸団体の方々のご指導・ご協力のもと、七つの地域に於いて十次に亘り遺骨収集・受領派遣を行ってまいりました。今年度、当法人より派遣された隊員は総勢四十七名、該地

にて一三七七柱の御遺骨をお迎えすることができました。お迎えした御遺骨は政府によって調査が行われ、身元が判明すれば御遺族の元へお返しし、身元のわからなかった御遺骨は五月に千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納骨されます。

次派遣	派遣地域	派遣隊員	収集柱数	日数
269	硫黄島(第1次) 6月30日～ 7月16日	中川政則(社会人)	6柱	17
270	ハバロフスク 8月12日～ 8月30日	吉田良子(青山学院大学3年) 池田祥子(社会人)	37柱	19
271	モンゴル 8月22日～ 9月6日	五十嵐誠人 (青山学院大学4年)	14柱	16
272	沿海地方 8月29日～ 9月17日	藤浪達哉(法政大学4年) 中山垂理紗 (フェリス学院大学4年)	119柱	20
273	硫黄島(第2次) 10月7日～ 10月22日	青坂健一郎 (東京国際大学4年) 林口征史(同志社大学4年)	51柱	16
274	東部ニューギニア 11月10日～ 11月25日	山本沙織(国士館大学4年) 豊嶋美由紀(社会人)	214柱	16
275	硫黄島(第3次) 12月2日～ 12月17日	田中雄也(社会人)	284柱	16
276	硫黄島(第4次) 1月26日～ 2月15日	学生9名 社会人8名 靖国神社神官1名 計18名	481柱	21
277	沖 縄 2月10日～ 2月19日	学生13名 社会人3名 計16名	8柱	10
278	ソロモン諸島 2月26日～ 3月19日	山澤健太(日本大学4年) 西富謙太郎(社会人)	163柱	22
計	10次派遣	延べ47名(学年は参加時)	1,377柱	173

新学生代表挨拶

受け継ぎ渡す



平成二十三年度学生代表
山口 美朝
(拓殖大学四年)

この度、平成二十三年度の学生代表を務めさせていただくこととなりました。拓殖大学商学部国際ビジネス学科四年の山口美朝と申します。以前から遺烈を読んで頂いている方とはこの紙面上で、あるいは派遣中やその他の行事の際にはお会いしたことがあると思われれます。大学一年生の夏からJYMAに加入し、早三年が経過しようとしております。初めてシベリア抑留中死亡者の遺骨収集派遣に参加してから、私は命の尊さと、この慰霊事業に関わる方々の姿勢、そしてそこに携わる私達青年の在り方について考えて参りました。様々な方々とお話をしき、多くの先輩方にご指導頂きました。そこから私はやっと、一つの結論に至りました。

誤解を恐れず敢えて申し上げますと、JYMAとは、保守主義団体ではなく、啓蒙活動団体でもありません。旅行代理店でもありません。遺骨収集事業、慰霊事業を行い、青年達が「遺骨収集とは」「慰霊事業とは」「戦争とは」「平和とは」を考えることのできる場であると思えます。そこには一切の強制力もありません。私はこれから卒業するまでこれを基軸に活動に尽力するつもりです。

我々の行う遺骨収集事業は、終わりある事業です。今も祖国に帰れず迎える待つ御遺骨はありますが、その御遺骨もいつかはすべてお迎えしなければなりません。ではその後私達は何をすべきなのか。それは先輩達が創り上げた海の向こうの方々との繋がりを絶やさず、戦争や抑留の史実風化をさせないことだと思います。

私達は忘れてはいけない「過去」と、これからの「未来」の両方と向き合っていく必要があります。まだまだ勉強しなければならぬことも

多く、様々な面で不安もありますが、私は立ち止まりません。今までの活動で得たものを信じて歩み続けまます。至らない点もあるかと思えますが、それは仲間達が助けてくれると信じています。これから一年間、どうぞよろしくお願いいたします。

新副学生代表挨拶

更なる発展に向け



平成二十三年度副学生代表
山口 葵
(中央大学四年)

平成二十三年度の副学生代表を務めさせて頂くこととなりました。中央大学文学部人文社会科学科哲学専攻四年の山口葵と申します。

この度の着任に至るまでの経緯といたしましては、二十三年度学生代表となりました山口美朝の熱意と、懸命に取り組む姿勢に心を動かされてきたことが動機となり、彼を支えたいと思い、志願致しました。

彼が先に述べている通り、山口美朝ならば、その強い思いで様々なことを成し遂げてくれると確信しております。私はJYMAの一隊員として、また彼の親友として、できる限りの力で彼を支えていきたいと思っておりますし、恐らく他の学生も同じ気持ちをもちながら動いていくのだと思います。

皆様が支えて下さっているJYMAは今年度、先輩方が作り上げてきた地層にしっかりと根をやしなから、どんどん成長し、未来へと伸びて行くことと思えます。

私自身も、過去三回の派遣で体験したこと、様々な方々に教えて頂いたことを、次の代へ、そしてさらに次の代へと伝えていきながら、自らも学び続け、皆様からご指導頂き、人としても成長していきたいと思っております。

中村前学生代表、山澤前副学生代表をはじめ、諸先輩方から意思を受け継ぎ、一生懸命努めて参りますので、一年間どうぞよろしく願いたします。

退任のご挨拶

仲間



平成二十二年 度学生代表
中村 貴洋
(青山学院大学卒業)

まず、平成二十二年度の副学生代表を務めてくれた山澤に心から感謝を申し上げる。彼がいなければ私はJYMAのことを知らぬまま大学生活を終えていた。この一年間では、「JYMAに入っていない大学生活はどうなっていたであろうか」と考える機会も多かった。当然ながら、戦史や慰霊のこと、そして私と共に活動してくれた仲間達とは出会えなかった。

大学二年の夏に沖縄県に於ける慰霊行進、ガダルカナル島の慰霊碑清掃を行ったが、当時の私は、そこから更に活動を続けていこうとは思っていなかった。それは、携わった慰霊事業の必要性は理解できて、戦友の方や御遺族の方の気持ちに近づくことができず、

辛かったためだ。平成二十一年二月の沖縄自主派遣、最後にこの派遣に参加し、それでも気持ちが変わらなければ退団することを決心し、参加した。

十日間の派遣が終わったとき、私は活動を続ける気持ちを固めていた。そこには、素晴らしき仲間達がいたからだ。

六十五年前、多くの人が大切な人を失った。それを知り、今も思う人達が広報活動や慰霊事業に力を入れる。同じ立場であれば、私もそうするだろう。失った大切な者のためにできることをするのだろう。昨今の震災の被災者も、そこでボランティアをする者も同じである。「人を想う心」が人を動かしている。

次を担う後輩たちにも、「仲間」「想う心」を大切にしてほしいと願う。また、至らない点も多い私であったが、それでも御指導御鞭撻くださった方々、支援者の方々、理事の方々、そして後輩達に、心より深く御礼申し上げます。

退任のご挨拶

四年間の活動を振り返って



平成二十二年 度副学生代表
山澤 健太
(日本大学卒業)

学生生活の中で戦史考察に取り組みたいという目標は予てから持っていた。大学一年時、学祭発表にて、ミャンマー暴動で銃殺された日本人ジャーナリスト事件をテーマに映像制作をしたのがそもものきっかけであった。作品を見してくれたJYMAの隊員であった友人の薦めで、私は当法人の活動に参加した。

初参加の派遣は沖縄自主派遣であった。当時は「この時代に戦死者の御遺骨に触れる」ということに強い衝撃を受けた。未だ戦地の跡には戦後問題が残っている。全てはそこから始まった。大学二年時に訪れたソロモン諸島では慰霊清掃事業を通して戦勝国と敗戦国の違いを目の当たりにした。米国の

の慰霊碑はきちんと管理されていた。しかし、日本は違った。敗戦国としての歩は根強い自虐観をもち、結果戦争から遠ざかることを良しとし、過去の先輩方の功績は見向きもしない。アウステン山に建立された慰霊碑は現地人の遊び場と化し、見るも無惨な落書きで汚されていた。

しかし、私の考えでは現状教育では仕方ないという思いがある。教科書だけで得た知識では、普段我々の活動で得られる人の想いや経験を伝えることは難しい。ではどうしたら良いか。それは自分たちの活動を現代の視点で咀嚼し、紹介することだと思う。その思いを体現したのが昨年度立ち上がった「戦史検定」であり、後輩や理事が丸となって取り組む「勉強会」だ。今後はこれらの活動に社会人という形でサポートしてゆきたい。

関係者・支援者の皆様には四年間在籍させて頂いたことに感謝します。

退任のご挨拶

事務局を去るにあたり



平成二十二年事務局長
宇都宮 大起
(拓殖大学卒業)

私がJYMAに入団したのは一年生の四月でした。入学以前よりシベリア抑留に興味を持っていた私にとって一年生の九月という早い時期に遺骨収集にシベリアに行けたことは、何よりも大きな経験となり、派遣で御一緒した安齋先輩の遺骨収集に対する真っ直ぐな姿勢は、「この一回の派遣に留まらず、もっと積極的に自分も取り組んで行きたい」と思わせるものであり、今日に至るまでの大学生活の過ごし方を決定付けるものでありました。

その後、何度か挫折を経験し、皆様には御心配をお掛けしましたが、その都度、暖かく迎え入れてくれた懐の深さに感謝しております。思い返すと、私がこの活動で得た一番の宝は、人との結びつきでした。この

四年間で多くの支援者の方々や、先輩方と接してきましたが、皆様の一言、一言が私にとって大きなものでありました。

取り分け、昨年度の学生代表である森先輩には手厳しい言葉を多々、賜りましたが、森先輩の慰霊顕彰に対する姿勢は、私には大変、大きなものでした。残念なことに、私は先輩方の言葉を汲み、全力でこの活動に取り組めたかと卒業間際になって思うと色々と心残りが多々あります。私は、この四年間の活動の中で、何か形に残るようなことを出来たかと言われれば、出来なかったのではないかと思います。

来年度、学生代表を担おう山口美朝君以下、後輩諸君は精力的に慰霊顕彰に取り組みたいという気概を持っており、彼等が中心となって取り組む来年度は、今年度以上に良いものになると確信しております。

私はこの活動で得た気持ちを、学生時代という風に区切りをつけることなく、一生取り組んで行きたいと思っております。御遺族や戦友の

方々が私に語った想いは、後輩に伝えていくと同時に、私自身に課せられた命であるとも思っているからです。戦後六十六年を迎える今年、先の大東亜戦争に対する認識あの時日本人は何故戦い、散華されて行ったのかという気持ちを、理解する人間は、益々、減少することでしょう。それを理解する人間の減少こそ、未来を、益々危うくするのではないかと思います。先人に感謝出来ないで、未来を築くことが出来るとは思えません。

そのような時代に於いて、JYMAを離れたとしても私は私なりに、慰霊顕彰に取り組んで行き、一人でも多くの人間が、英霊や戦友の方々に対して感謝の意を捧げられるよう、自分に何が出来るかを考えつつ取り組んで参りたいと思います。そして、我々の活動を日頃より支えて下さっている支援者の皆様に感謝の意を捧げ、変わらぬ御支援を賜わると共に、頑張りが必要ならば叱咤を頂ければ幸いに思います。皆様本当に有難うございました。

沖縄自主派遣へのご支援ありがとうございました。

『遺烈』129号、130号、131号の紙上にて、本年度の沖縄自主派遣隊への篤志賛助金を一口＝3千円で募らせていただきましたところ、32名の方々より御篤志を頂戴いたしました。お蔭様で、十分な収集活動を行うことができました。

ここに謹んで事務局、学生一同厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。



- ＝ 沖縄派遣篤志賛助者 ＝ 根木東洋様、吉田康浩様、松沢恵子様、村山徹様、西岡成尅様、白方勝彦様、佐野賢治様、坂本隆司様、齋藤信二様、巽恵子様、原田俊介様、水田美智子様、山崎茂様、菅原道熙様、柴田誠悦様、内藤寿美子様、影山幸雄様、池田英子様、小沼仁様、伊藤久夫様、鴨尾進様、半田博昭様、田口庄次様、松谷希次様、吉池高男様、上田雄一様、小池満様、旧戦友連様、豊嶋純子様、西口和成様、藤村ふみ様、豊嶋美由紀様 (順不同)

ソロモン諸島
戦没者遺骨帰還団帰還!!!

該地にて
百六十三柱を受領し、
本国にお迎えす!!

去る平成二十三年二月二十六日
から三月十日の計十三日間の日程
で、政府はソロモン諸島に於いて
戦没者の御遺骨収容を行った。当
法人からは二名の隊員が参加した。

派遣隊員

隊長

山澤 健太 (日本大学四年)

西富 謙太郎 (社会人)

派遣団はソロモン諸島ガダルカ
ナル島のホテルを拠点とし、各政
府機関等に於いて現地の方が収集
した御遺骨の受領、洗骨、焼骨を
行い、日本へお迎えした。帰還翌
日の十日には、千鳥ヶ淵戦没者墓
苑にて御遺骨の引渡式が行われ、
派遣団から厚労省に引き渡された。
ソロモン諸島においても、継続した
遺骨受領が望まれる。

ソロモン諸島派遣報告文

ソロモンに見た情景



山澤 健太
(日本大学卒業)

JYMAに入団し、早四年。私
にとつて政府派遣団として遺骨収
容事業へ参加するのは初めてだつ
た。自主派遣団や慰霊清掃事業と
して沖縄やガダルカナルに向い
たことはあつたが、日本政府の基
に行動を共にするのは今派遣が初
めてである。今年度最後の政府派
遣団に参加させてもらうことはと
ても緊張感の漂つたものであつた。
出発日、成田にて結団式を行つ
た。その際、一人の方から「JY
MAは毎回よくやってくれている
よ、年寄りばかりだけど宜しくね
」と言われた。また様々な助言を頂
いたことで、自分たちJYMAの
スタンスは収容事業をより安全に、
円滑に行うための「緑の下の力持

ち」の役目であるんだと自分に言
い聞かせた。

オーストラリアのゴールドコー
ストを経由し、かつて日本の先輩
方が欧・米軍と死闘を繰り広げた
ガダルカナルへ向かう。圧倒的な
敵軍の銃撃、爆撃。そんな鉄風雨
の中を、食糧を積んだ支給船が安
定して往来することなど出来るは
ずもなく、仲間の待つ鳥間近で沈
んでいったと聞く。食糧も底を尽
き、蛇や虫、草木を食みながら敵
軍と対峙した日本兵のなんと精神
強きことが。島に残された自身の
命、同胞の亡骸を前にさぞかし心
痛めたことか。

「どこまで私は知り得ることが出
来るだろう?」向かう機内で資料
を読み返しながら、想像を広げて
みた。機内の窓から見えたソロモ
ン諸島の光景はとても美しい。こ
の島が戦地であつたことを忘れさ
せるほどであつた。

現地に到着し、まず表敬訪問。
午前中いっぱいをかけてホニアラ
市内、関係者各位(ソロモン国博物

館/ホニアラ市議会環境衛生課/
ホニアラ中央警察署)の表敬訪問を
行った。今回の政府派遣に参加し
て強く感じたことの一つに、協力
体制と理解を頂けなければ日本人
が他国で遺骨収集をするのは困難
だということだ。厚労省のお二人
の事前調整と準備を見てそのこと
を強く痛感した。現地の方々には
現在進行形の生活があり、そこに
日本政府が踏み込む。一刻も早く
遺骨収容を完了したい想いとは対
照的に地道な作業が大切となる。
そうした意味で理解を得るための
本日の表敬訪問は重要であるとい
うことを強く感じさせられた。

ニュージョージア島のムンダ、
ガダルカナルのホニアラで御遺骨
の受領を行い、焼骨式前に洗骨作
業を行った。ムンダでの洗骨作業
時であつた。もう一人のJYMA
隊員である西富さんにとつては、
何もかもが初めての経験であり、
受領した収納袋から取り出した最
初の御遺骨が、形のはっきりした
頭骨であることに絶句していた。

銃痕の残る生々しい御遺骨。発見者の現地村人によると、鉄兜と一緒に見つかったとのこと。その鉄兜にもはつきりと穴が空いていた。それだけではない。大腿骨には鉄片がめり込み、爆撃にあつてしまったことが伺えた。私自身、その鮮烈な光景に言葉を失ってしまった。西富さんが「日本へ無事に持ち帰れた暁には遺族のもとに帰れたかをきちんと知りたい」と佐藤団長に申し出たが、「個人プライベートの都合上教えられない」という会話を交わしていた。私自身も御遺骨が気がかりでしようがなかった。「無惨な最期を遂げた御遺骨、絶対に無事に日本に持ち帰る。」熱くなる想いを抑えて、作業を進めた。

アウステン山にて執り行われた焼骨式は強い日差しが降り注ぐ日だった。ソロモンの日中の熱さに汗をかきながらの作業であった。焼骨の後、御遺骨を一柱も残すまいと骨上げをした。百六十三柱受領した御遺骨は収容箱に収められ、

ホテルの一室に仮安置された。

約十日間に亘るソロモン派遣がようやく終わる。安堵の思いとは裏腹に今回の派遣団参加では様々な側面から“遺骨収容事業”を見つめられた。一つには先に述べた国の事業として諸外国との連携・調整が必要であるということ。もう一つは遺族・遺児たちと共有した想。「六十年以上も昔のことを、今になって引きずることはない」と語った方もいたが、それでも収容派遣に参加するという心は心の片隅に太平洋戦争の出来事を思い続けているのだろう。この二つの視点が自分にとって強く印象が残った。

そこに自分の考え続けた思いをあてはめるとしたら、現地の人々と派遣期間内で目一杯に打ち解けることが必要だと感じた。その上で我々を理解して頂き、同時に歴史を理解してもらつ。遺骨収容を続けるには、我々日本人だけが当事者という形にはいけない。

帰国前日、追悼式を行った。朝

から張りつめた空気を感じた。鮮烈な印象を残した御遺骨は私の胸元にひっそりと箱に収められている。遺族会、ソロモン会の方々にとつてもこの日は特別な日であつたに違いない。思いを込めた追悼文をJYMA代表として読ませて頂く。すると今までの派遣で見えた様々な風景が頭をよぎり、その鮮明な記憶を辿りながら文章を読む声にも力が入った。国難に耐え、祖国のために戦われた方々。その一つ一つの場面を回想するつもりで追悼の辞を読み上げた。

三月九日夜、御英霊と共に厚労省職員に迎えられ成田に到着した。遺骨箱を一人一人が持ち、席に座る。九段に着き仲間が出迎えてくれた。長旅の帰り、久しぶりの再会はとても嬉しい。南半球の温かな気候に慣れたせいか、日本は寒くしまった。早めに就寝し、慰霊祭に備えた。

次の日、九段は快晴であった。この派遣の最後でもあり、御遺骨とのお別れでもある。太平洋戦の

日本人遺族者であろうか、来賓の方の中には涙を流す人もいる。そんな方々が私たち派遣団の座席を通る度、深々と頭を下げる。心の中でソロモンの情景が広がった。涙が止まらなかつた。

「今後、社会人になつても出来るかぎりのことをしよう。」私の中には強い意識が芽生えた。今回の派遣で得た経験を、私は一生忘れなかつた派遣団の方々、支援者の方々に、改めて御礼申し上げる。



現地の子も達との交流も大切

平成二十一年度沖縄派遺報告文

経 験



笹原 千佳

(日本大学三年)

今回、友人に誘われて初めて沖縄遺骨収集派遣に参加した。遺骨収集というものに興味があつたわけでも、戦争に詳しいわけでもなかった。むしろ、知りたいから参加したいと思つた。学校で戦争のことを学んだのはすぐ前のことで忘れていたし、沖縄戦に関しては無知であつた。しかし、勉強会で沖縄戦についての本を読んでレポートを書き、ほかの人のレポートを読んで、少しでも沖縄戦について知ることができた。この勉強会は基礎知識としてもすごく大きな意味を持つものであつた。

いざ沖縄に行き、遺骨収集を実際に行ってみて、考えることが多くなり少し怖くもなつた。私が御

遺骨をお迎えしてよいのだろうか、六十年以上も眠っていたのに掘り返してよいのだろうか、この御遺骨は本当に戦争で亡くなつた方のものなのか、遺骨収集という目的のためには自然破壊みたいなことをしてよいのだろうか、作業をしながら様々な疑問や矛盾を感じた。自分が遺骨収集をやる意味がよくわからなくなつてしまつた。しかし、遺族連合会主催の合同収集のときに戦争体験した方にお話を聞いてなにかが固まつた気がした。その方は、親戚を沖縄戦で亡くして、死にものぐるいでその方の御遺骨を探していた。その思いを聞いたときに私は、御遺族の力になりたいと思つた。お話をさせていただき方はとてもお元気であつたが、沖縄戦は六十年以上も前のことだから、御遺族は高齢であることが多く、自分自身で御遺骨を探しに行くことは難しいという。私は、自身では御遺骨を探しに行けない方々の力になりたいと思うようになった。御遺族とお話

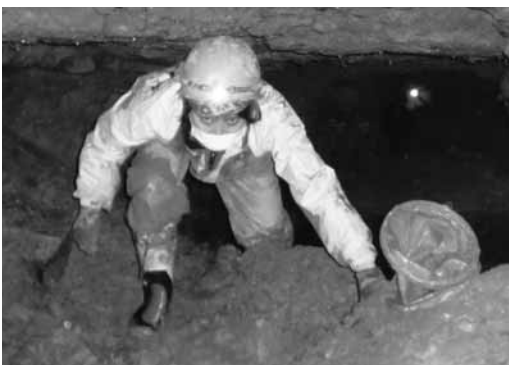
してきた経験から、遺骨収集を自分ができることへの意味を少しだけみつけることができた。

そして、もう一つ感じたのは、戦死した方々への感謝の気持ちである。私の親戚では沖縄戦で亡くなつた人はいない。沖縄での戦いで本土へ攻撃を阻止してくれたから、私の先祖が生きることができ、私という人間が存在できているのだと感じた。その方々への感謝を込めて、収集を行おうと思つた。

作業場所は蒸し暑い壕の中やジャングルと呼べるような草木が生い茂る所であつた。その中に作業を着て、ヘルメットをして入つていった。作業はとても体力的に大変であつた。歩兵八十九聯隊壕では、縦穴の中にぎっしりとまつたゴミを取り除く作業がとても大変であつた。そこから御遺骨や爆弾の信管が出てきた時にはとても驚いたし、ゴミを壕の中に捨てる人間に憤りを感じた。収集作業は普段入れないような場所に入り、当時の壕の中の生活や過酷な環

境が想像できた。

この沖縄派遣での貴重な経験をさせていただいたことで、戦争を知り、考えるきっかけになつた。体のすべてで戦争の悲惨さや過酷さを感じることができた。そして、多くの人と出会うことができて、かけがえのない仲間を持つことができた。私は沖縄派遣での経験も仲間も一生大切にしていきたいと思う。今回支援していただいた皆様、この派遣に関わつたすべての方に感謝いたします。ありがとうございました。



収集地には危険も潜む

被災のお見舞いならびに 慰霊祭、活動報告会中止のお知らせ

去る3月11日、東北・太平洋沿岸地震が発生しました。皆様の知己、あるいは親類縁者の方々にも、この度の震災で少なからず被害を被られた人も多いのではないかと思います。被災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます。また、犠牲となられた皆様のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

今、私たちは未曾有の国難に遭遇しているといっても過言ではありません。私たち学生も、浅学非才の身ながら社会集合体の成員として、困窮している方々、被災地と共に痛みを感じ、連帯しているとの真心を示す行動を起こすべく準備をはじめ、ともに日本の復旧や再生に汗を流していく所存です。敗戦後、焦土の中から現在の日本を築いた先人たちの困難を思えば、必ず再建できるもの確信しております。

「がんばろう東北！がんばろう日本！」

なお、3月12日に予定されていたJYMA日本青年遺骨収集団 平成22年度慰霊祭、活動報告会については、鉄道輸送が寸断され、余震による被害も懸念され、更に懇親会予定会場では、地震の影響で人身事故が出来致しました。学生一同も同会の実施に向け準備をして参りましたが、この様な状況に鑑み、同会は中止といたしました。皆さまにはご理解賜りますようお願いいたします。

JYMA日本青年遺骨収集団 理事・学生一同

社頭広報出席者

平成二十三年三月十三日

(集合後、世情状況を判断し中止・解散)

旧戦友連

石橋聡 / 内藤寿美子 / 内藤寿美子 / 太田

弘樹 / 白石一朗 / 榎泰智 / 松田由美 / 榎

田祐亮

JYMA

赤木衛 / 村山かおり

平成二十三年三月二十七日

旧戦友連

石橋聡 / 内藤寿美子 / 太田弘樹 / 松田由

美 / 白石一朗 / 榎田祐亮 / 藤井茂 / 森岡

斉 / 大崎朝秀 / 榎泰智 / 内田二郎 / 菊地

智太

JYMA

赤木衛 / 村山かおり / 宇都宮大起 / 山本

沙織 / 山口美朝 / 山口葵 / 川又祐子

第二十七回

「靖国神社の桜の花の下で」

「同期の桜」を歌う会

中止のお知らせ

平成二十三年四月二日(土)

に予定されていた「靖国神社の桜の花の下で」「同期の桜」を歌う会」は、世情判断により中止となりました。

編集後記

この度の地震・津波の影響により被害に遭われた全ての方々に、お見舞い申し上げます。私の住む地域は計画停電対象地域となっており、連日報道される被災地の様子を鑑みますと、それくらいなんでもないことのように感じられます。現在彼の地では何もかもが足りない状態です。私個人にできる支援は些細なことがかもしれませんが、少しでも貢献できるように尽力していこうと思います。(瀬)

今回の震災によって発生した福島第一原子力発電所の問題について、政府及び東京電力は、正確な情報開示と迅速、明瞭な対応をするべきである。「直ちに健康に影響するものではない」という台詞は聞き飽きた。国民に非難されるのを恐れて言うべきことを言えないのだとすれば、それは怒られるのが恐くて発言できない子どもと同じだ。今、政府は試されている。そして我々国民も今起こっている事態を受け入れ、考えなければならぬ。(美)